

2021春闘妥結にあたってのバス東北本部見解

J R東労組バス東北本部は、2月26日に申8号「2021年度賃金引上げ等に関する申し入れ」を行い、新型コロナウイルス感染症の拡大が収束しない現状の中、連合が2パーセント程度の要求を掲げたものの、多くの産別・単組が定額要求やベースアップ要求見送り等の方針を打ち出し、さらにはバス東北会社の2020年度の上半期の業績についても9億5千万円という巨額の営業損失を計上しており、非常に厳しい情勢でたたかひの幕を開けた。

第1回の趣旨説明の中で、2月の福島県沖地震の影響による新幹線代替輸送の無事故完遂や古川営業所・秋田支店の閉鎖による業務移管など効率化施策を受け入れている組合員・社員の努力、昨年年末手当の減額による総所得の落ち込みなど全組合員の日々の奮闘が、コロナ禍や災害が激甚化する中においても利益を生み出している現実には変わりはないこと強く訴えた。そして今春闘の最大の要点は「今回ベースアップがなければバス東北会社としては4年連続のベアゼロ」ということを改めて強調した上で、私たちの高まる労働力の価値に対して最大限評価し「十分な人への投資」を行うためにはベースアップは必須条件であり、物価上昇と消費税増税等がある中でも生活を維持向上させるために賃金引上げが必要であることを合わせて強く主張してきた。

しかし、3月29日の第3回交渉においての会社回答は、「2020年度の年間収支の見通しが15億3千万円の赤字になり非常に厳しい経営状況であること」「コロナ感染症の収束が見えず先行きが不透明であること」を理由にベアゼロ、定期昇給については、所定昇給額の4分の2とするという回答であった。これまでの交渉において、経営状況、賃金形態、社員の意識からしても本体とバス東北では全く違うことを議論してきたにも関わらず、会社回答は、J R東日本会社、バス関東会社と全く同様にバス東北会社社員のことを考えていないものであった。到底納得の出来るものではないため、席上妥結はせずに持ち帰り分会代表者と議論することとした。これまで全組合員に「春闘アンケート」を実施し要求額や要求根拠、意見や要望などを集約し、組合員・家族と多くのJ R東労組の仲間からの檄を受けながら粘り強く交渉を重ね、精力的に議論を展開してきた中で今回の回答は、全組合員の思いを踏みにじる内容であり、日々奮闘している組合員・社員への誠意が全く感じられるものではない。今後の賃金を含めた様々な交渉に多大なる影響を与えかねないことから妥結には至らなかった。

回答日以降、各職場で議論を積み重ね組合員の声を集約し、4月12日の分会代表者会議で議論を行った。あくまで組合員の声をもとにつくり上げてきた春闘であり、席上妥結をせずに労働組合としての姿勢を示した。その声を会社側は真摯に聞くべきである。現在のJ R東労組の組織現実を受けとめつつ、組合員の雇用と生活を守るために要求すべきものは要求していく姿勢に何ら変わりはない。組合員の期待に応えられなかったことについて21春闘は敗北と言わざるを得ないが、全組合員の声に基づき要求を打ち出し、一枚岩となったたたかひをつくり出したことは大きな成果であり、これを教訓に今後の施策や業務問題に向き合っていかなければならない。

これからもバス東北本部が一丸となり、「新生J R東労組運動宣言」のもとJ R東労組とバス東北会社の未来を守り抜くために、更なる組織強化・拡大を実現し奮闘していくことを確認し、本日「春闘妥結」とし、見解とする。

2021年 4月 14日
東日本旅客鉄道労働組合
ジェイアールバス東北本部